

私たちは里子の集いで学んでいます

スマランのフォスター・スチューデント・グループ

スマランのエリアセンターでは学習会を開いています。日本語も習います

PPKIJのスマランエリアはフォスター・スチューデント・ミーティングを第2、第4日曜日に定期的に行っています。場所は私達のオフィスで、子ども達が集まれるベースキャンプのようなところです。ミーティングでは中学生と高校生への活動があります。第2日曜には日本語を、そして第4日曜には英語と一緒に学んでいます。これらの活動によって、私達はより気持ちが高まり、やる気がでます。それからほかのフォスター・スチューデントとの仲も深まります。英語の勉強は英語がわかるようになるだけではなく学校での成績アップにもつながっています。日本語の勉強は、日本語の手紙が少しずつわかるようになる新しい経験です。それぞれ他の活動があつて全員のフォスター・スチューデントが来られるわけではありませんが、全体に私達の活動はうまくいっています。

日本のお母さんに手紙を書くのが楽しい

スマランPPKIJでは毎月手紙を書いているが、それらをまとめて2ヶ月ごとに送っている。手紙には学校で起こったこと、テストや授業について、それか



らたまに先生の授業の進め方など書きます。テストは6ヶ月に一度あります。テストの後の中間休暇前のクラスミーティングはとても楽しい。そのことをフォスター・ペアレンツに書いたりする。それから祝日や宗教行事(祝日)、例えば独立記念日やイスラムの祝日Idul Fitri、仏教のWaisakなど、たくさん書くことがある。それから近所や家族についても。例えば“Resik-resik kutoh”は日曜日にみんなで街をきれいにしようという活動のこと。Idul Fitriは年に一回あって、4家族以上が集まる大変にぎやかな日で、おいしい特別な料理を食べ、家は大変にぎわうということなどです。時々、自分たちの感情についても手紙に書いたりする。生活のなかで起こる悲しいことや嬉しいこと。それから夢や将来についても書きます。フォスター・ペアレンツからの手紙にある質問に答えたり、返事をくれたお礼を書いたりもする。それはとっても嬉しいことのひとつ。毎回ではないけどときどき写真も送ります。私たちの手紙がフォスター・ペアレンツに喜んでもらえたら、とても嬉しいです。



娘は輝いています

里子を持つ母親からのメッセージ

私の娘は、Ary Avitaという名前のフォスター・スチューデントです。娘が高校生のときから受け取っているC.P.Iの奨学金にとても感謝しています。そのおかげで私も娘を誇りに思うことができます。父親を速くに亡くしたため、C.P.Iからの支援がなかったら、私どもの家庭では、とても娘を大学に行かせることは不可能なことでした。娘は奨学金をもらうようになってから、自信を持ち、とても明るい活発な子どもになりました。この奨学金は学費を払う助けになります。それから、大学で続けて勉強することができます。現在娘は、Deponegoro University の産業エンジニアを学び、最後の8セメスター目*を終えようとしています。娘は卒業と同時に、就職することを希望しています。今はそのための準備に忙しく動いています。私にとっても卒業を準備する時期がきています。C.P.Iからの奨学金のおかげで、必ず立派に卒業し、社会の役に立ってくれると思っています。

(* 大学の一年次前期を「第一セメスター」後期を「第二セメスター」と呼ぶ。第8セメスターは四年次の後期に当ります)



キャンバスの木陰で語り合う学生たち

一日は朝5時の“お祈り”から始まります

私の名前はPrinantiです。でも私の家族はいつも”Hantini”と呼びます。ジャカルタで働いている兄がいるのですが、私は時々とても兄に会いたくなります。兄が家にいると、とても賑やかです。兄は私のことを大切にしてくれます。そして、親切に相談に乗ってくれます。

私たち家族は、そろって(イスラムの)お祈りをするために、毎朝5時に起きます。それから7時に大学に出かけるために準備をします。父も毎朝おなじようにその時間に仕事にでかけます。母は主婦なので私たちのために、全ての家事をこなします。私はとても忙しい生活です。月曜から金曜までは1時間かけて毎日大学に通います。1時間の通学は長いでしょ？課題がある日は夕方家に帰ってきます。週末にはマリアビーチに出かけたり、気持ちの落ち着

く場所に出かけたりします。忙しい生活でも家族が集まる時間はとても幸せです。私は家族を誇りに思っています。



高地の農耕地開拓プロジェクトで働いています

ファシリテーターとして、狭き門をパス

スマラン地方政府とPPKIJによって「高地土地なし農民を救う計画」が、世界銀行のJSDF(日本社会開発基金)で始まりました。このプロジェクトは、高地の住民を救うために農耕地を開拓し、果樹栽培とその加工工場を組織的に構築しようとするものです。中部ジャワのエリアから若いフィールド・ファシリテーター(促進者)が選ばれました。PPKIJジョグジャカルタからは二人選ばれました。私(ジュリー)とファイジン(ニックネームはミスター・ビーン、いつも人を笑わせるから)です。私は高校卒業と同時に奨学金を終えましたが、ファイジンは今も教育里子です。

私は国際関係局に許可されていたにもかかわらず、大学進学ができませんでした。入学金が払えなかつたからです。私のような低中流階級にあたる者にとっては入学金と授業料は高すぎます。だから家計を助けるために働くことにしました。そしてお金を貯めていつか大学にいけることを願っていました。

最初、PPKIJのジョグジャカルタ地域リーダーのスティクノ先生からJSDFプロジェクトに参加するチャンスが与えられました。彼はとてもいい人で、頭がよくて寛大で、私のような教育里子卒業生に気持ちを傾けてくれます。私はそのとき、歯科備品のマーケティングスタッフとして働いていましたが、応募したのです。

ジョグジャカルタからは11人の違った背景を持つ候補者が応募しました。4月6日、私は他の参加者とともにスマランにむかい、まずはダルヨノさん(PPKIJのスマラン地域リーダー)の家(兼PPKIJオフィス)に泊めてもらいました。ジョグジャカルタからスマランまではバスで約3時間です。4月7日から9日は、日本のC.P.I.から小西さん、バンドンからジャジャさん、ブルワディさん、エランさん、それからスマランのトトさんやトゥリスさんなどに指導され、リーダーシップ・トレーニングが行われました。それによってJSDFプロジェクトの有給ファシリテーターとして12人の中に選ばれたのです。



住民主導による組合運営型モデルケース

このプロジェクトはインドネシアでは初めての試みです。農家の人たちが力を出し合って、開拓し、栽培し販売する仕組みを組合組織でやろうとするものです。私たちファシリテーターは、プロジェクトの中心になって、事業の推進役を担います。私にとって新しい体験で、他の町からの友達ができたり、それからトレーニングに基づいてブレインストーミングやディベーティングコンテスト、考えを共有したりすることはとてもいい経験です。プロジェクトはとても興味深く、私にとってチャレンジもあります。私達は土地の調査、これからプロジェクトの対象者となる農民の調査、ソーシャライゼーション、ワークショップなどを3年間していくことになります。

難題を乗り越え、目的に向かっています

残念なことに、その後、中央政府からのコンサルタントと実施チーム(C.P.I.-PPKIJ-スマラン政府)との間で実施ガイドラインに食い違いが出て3カ月間待つことになりました。

C.P.I.の小西さんとPPKIJと36村代表との間では、いろいろなワークショップを始めることになっていました。村人たちが、JSDFプロジェクトを自分たちで進める気持ちを高めるためです。私たちも、そのつもりで準備しましたから、何ヶ月も待つことはとてもつらく、家にいながら、家族にいつ仕事に戻るのかと聞かれるたび、胸が痛みました。

でも、ようやく8月から始まることになり、ほっとしています。

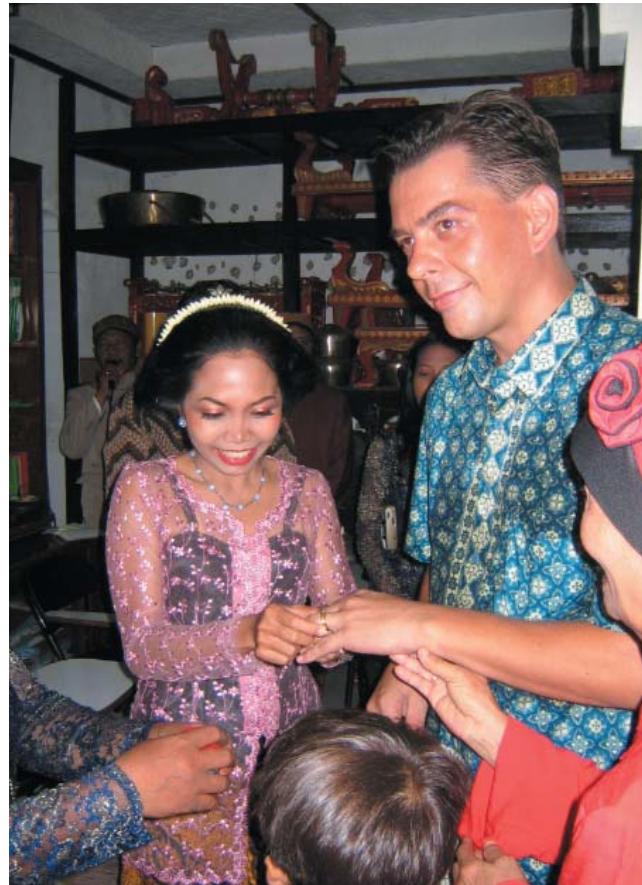
このプロジェクトは、インドネシアの模範的なものになることを信じて、頑張りたいと思っています。

日本と どこか似ている結婚式

Java Style Wedding Report:by S. Maeda

インドネシアの貧困格差の大きさは結婚式にも現れる。一般的な家庭の結婚式は家で行われる。庭や家の前の道にテントをたてて、招待客が入れるようにいすやテーブルを用意する。家を花や看板でデコレーションする。家の入り口近くの部屋に、新郎新婦、その両親がいて、来客の祝福にこたえる。部屋はとても暑く、ジャワの伝統的な衣装を着た新郎新婦は汗をかきながらも笑顔で挨拶してくれた。プロのシンガーが来て歌を歌うのだが、近所中に響き渡るその音楽は、結婚式の目印(耳印?)となる。

一方、比較的裕福な家庭の結婚式は、公共の会館やホールを借りて、セットする。豪華な料理に華やかな舞台。私はレセプションにホストを務めさせてもらった。朝6時から新婦の家に集合して、5人のレセプショニストを含む、大勢の家族・親類の女性、などなどが、メイクや髪をジャワの伝統スタイルにまとめる。つけまつげをつけ、とにかく化粧は濃い。みなまるでデビ婦人になる。髪型は何種類があるが、どれもでっかく、ウイッグをつける。(写真参照)はじめてこのスタイルを見たとき、ゲッ！すごい…と思ったけど、日本も似ていますよね。真っ白の顔に真っ赤な口紅、でっかい頭に白い着物に身をまとった花嫁。きっと外国人の人を見たらぎょっとするはず…。衣装



はおそろいのインドネシアの伝統衣装。日本の着物と同じように帯できゅっとお腹を締めるので、苦しいし、ぴったりしているので暑い。10cmはあるヒールをはいて、転ばないように小股で、まるでマネキンが歩いているようだ。家族の女性、関係者女性なども同じ色の伝統衣装を着る。私達は先に車で式場に移動し、来客にあいさつなどをしながら新郎新婦を待つ。来客はレセプションで名前を記入し、封筒に入れたお金を設置してあるボックスにいれ、お土産を受け取って会場に入る。(今回のお土産はキャンドルだった)新郎新婦がジャワの豪華な衣装に包まれて登場し、正装した家族が行列して入場。先頭にジャワの踊りを踊りながら、新郎新婦を糸でひっぱるような踊りで先導する人がいる。舞台に新郎新婦とその両親が着席し、300人から400人のゲストが一人一人挨拶しに舞台に上る。舞台は鮮やかな草や花で豪華に飾られ、ライトがまぶしい。ゲストは食べることよりもまず、この一番に挨拶をすることが何よりも大事。

ジャワ風に軽く握手をし、その手を自分の胸にあて、“Selamat Berbahagia”「おめでとう、あなたの幸福を祈ります。」と言う。あいさつをしたあとは、シンガーの歌を聞きながらおしゃべりと食事を楽しむ。来客の服装についてだが、日本と違ってスーツで来る人はほとんどいない。男性はフォーマルなズボンにシャツ。シャツはバティックが大多数でとてもカラフル。女性は、洋風ドレスの人もいるが、多くの人がバティックなどのロングスカートに、頭にイスラムのスカーフ(Jilbab)、それからマレーシアンドレスの人もいる。だいたい3時間ぐらいでパーティーは終わる。家で挙げる結婚式も、式場であげる結婚式も、どちらも新郎新婦、家族みな幸せそうでめでたしめでたし。



Ramaranの儀式



Ramaranに集まった親族



レセプションのホストを務めた5人(右端が筆者)



回想のインドネシア

特別寄稿 濱崎光男

「インドネシアへ里子に会いに行く」と友達に話した
ら、昔住んでいたことを知っている彼らは本当の
子供がいると思ったらしく「大変だねー」と言われ
てしまいました。実は自分の子どもに会いに行く
ような不思議な胸の高鳴りを覚えていました。

60年ぶりのインドネシア

私とインドネシアとのかかわりは、なにしろ半世紀以上も昔のことと、その記憶も日々おぼろになりつつあります。戦時中とはいえ、民間人として青春の日々を過ごしたスマトラ島パレンバンでの2年間の生活は、私にとって得がたい体験の日々でした。

インドネシア独特のオレンジ色の屋根瓦と真っ白な壁に絡まって咲くブーゲンビリアの真紅の花、聳え立つ椰子並木の葉ずれの音、色とりどりのカンナの花、街路を覆うガジュマルの濃い木陰を行く女性の優美なサロン姿も、しっかり瞼に焼きついています。スマトラ最長のムシ河沿いのパッサル(市場)には、四季を通じて熱帯の香り豊かな果物が積み上げられ、果物の王様ドリアンや女王と言われるマンゴスチン、庶民の味ランブータン、パパイアなどが色とりどりに芳香を放っていました。その傍らには両足をくくられてバタバタ大騒ぎする鶏が転がり、獲れたばかりの大鯰がひげをうごめかしていました。また塩漬けの干物が凄まじい異臭を放っていましたが、パッサルは活気に溢れギラギラした太陽の下でむせかえっていました。その雑踏を縫って街唯一の足ベチャ(覆つきの三輪車)が、チンチンとベルを叩きながら走り回り、ジャワ煙草の甘い煙とコーヒーの香りが流れていきました。これが私にとってのインドネシアの原風景です。



今は車とオートバイの間をねるよう走るベチャ



里子たちといっしょに

毎朝暗いうちからコーランがどこからか聞こえていました。毎週金曜日には会社の近くのイスラム寺院から悠々としたコーランの調べが流れ、白い帽子のハジ(メッカ巡礼のしるし)や黒い帽子のイスラム教徒が、広い敷地いっぱいに地に伏し、アラーの神を讃え、礼拝する光景をいつも見ていました。

夜ともなれば、昼間とはうって変わった涼しい夜風に吹かれ、満天の星空にかかる南十字星を眺めながらジャランジャラン(散歩)を楽しみました。また、時には夜の町に出て、南京虫に背中をかまれるのも厭わずに、ワヤン(影絵芝居)見物をすることもありました。

終戦後日本へ帰国してからも、第二の故郷インドネシアへの思いは消えるませんでした。

日本が失ったもの

今回のツアーで多くの里子たちに会いました。各地のそれぞれの里子たちの印象は違いますが、共通していたのは、我々日本と日本人がいつの間にか失ってしまったものを、インドネシアでは今尚、大切に保っているのではないか、ということでした。それは心の優しさであり、家族愛であり、祖国を愛し、民族の誇りを持っていることでした。里子たちは皆一様に明るく、C.P.I.の援助を感謝し日本のお父さん、お母さんと、もっともっと交流を深めたいと願っていました。私も彼らの幸せを祈らずには、いられませんでした。

(千葉地域会 濱崎さんから寄稿いただきました)

里子学生の夢を叶えてあげたい

日本の家族からのわずか数万円の奨学金で教育を支援することが、実際これほど多くの可能性と彼らの未来を大きくするのか、と彼らの頼もしい姿に感動したと同時に、はがゆい気持ちがした。日本の大学生が新しい服を3着ほど我慢すれば、彼らは十分に教育をうけることができ、家族の負担と心配が半分は軽減できる。それによって、優秀な生徒が社会にでたとき、この国を動かす力に少しでもなるのだ…そんな長期的な目で彼らを見てほしい、そう思う。

ここインドネシアで生活をして2ヶ月、彼らがどれほどお金に苦労しているのか、ひしひしと感じる。貧困層に位置する人口はどのくらいか、町を見ればわかる。

ストリートチルドレン、いやストリートピープル(大人も含め)の多さ、台風がきたら壊れそうな隙間だらけの家、穴のあいた服、真っ黒な煙をはく古いバイク…学校に行けないこどももたくさんいる。学費が払えない、制服が買えない、家事を手伝ってほしい、などの理由によって。そ



里子学生と一緒に近くの子どもたちに遊びを教える筆者(左後)

んな人たちの人生を、私達はお金というツールによって大きくいい方向に転換させてあげることができる。町を見ていると、何もしていない人がほんとうに多くて日本人の私から見ると、なんてもったいない、こんなに若くてパワーのある人たちなのに、と感じずにはいられない。同僚のインドネシア人に“なぜ?”と尋ねると、“人口の多いわりに仕事がないんだ、この国の長期にわたる問題だ”、と。そう、いくら外国企業が入ってきてても、この国は成長しない。インドネシア人の起業家がもっと増え、彼らでビジネスを発掘しなければならない。まだまだビジネスチャンスの多いインドネシアだからこそ、若い起業家に今、がんばってほしい。選ばれたC.P.Iの里子たちには、その可能性をひめている。日本の里親さんには、彼らを誇りに思い、インドネシアを里子と同じように愛し続けてほしいと願う。

そしてここにC.P.Iのインドネシア現地駐在より、支えて下さっている会員のみなさんにあらためて感謝の気持ちを添えたい。



誕生日祝:ささやかな集いだが、とても楽しい。心のこもった誕生日祝。そして、みんなの笑顔がとても素敵だった。

(スマラン駐在C.P.I. インターン 前田聰子)

PPKIJニュース

学費のアップで、里子たちの生活が困窮しています。彼らを助けるために色々な知恵を出して頑張っています。

インドネシアの教育支援をとりまいている事情を知ってください

2003年以来、インドネシアで中学生以上の子どもを育てている家庭は、教育事情の変化に困っています。大臣が変わると教科書がそのたびに変るので、年に何回も教科書を買うことになりました。中学校や高等学校の入学金や授業料は2倍近くなり、貧困な家庭では子どもの学業を続けさせることが、以前よりも難しくなりました。

リーダー会議で対策を練りました

C.P.I.の理事の皆様が2003年にPPKIJ中央委員会および9ヶ所の地域リーダーとの会議をしたとき、C.P.I.から戴いていた教育支援金の使い方を考え直さなければならぬとの話が出ました。いまでは、戴いた支援金の70%を子どもたちの学費や通学費、里子会活動に使ってきました。残りの30%のお金は、毎年の奨学生選び、地域事務所の費用、地域リーダー会議の交通費、PPKIJ本部の事務局費に使われていたのです。C.P.I.の理事のみなさんから、3つの課題が出ました。

ひとつは、この30%のお金を、教育里親さんの支援金からではなく、別の財源からもらえるように考えなければいけないということです。そうすれば教育里親さんからの支援金をすべて子どもたちに使うことができます。

ふたつめは、中古コンピューターを大学生にあげるプログラムを日本外務省の援助で毎年行えるようにすることです。インドネシアは原則として中古コンピューター輸入禁止の国ですから、C.P.I.-PPKIJのルートは特別なものです。このことが上手くいけば、大学生の勉強にはとても役立つでしょう。その活動は国の経済にとってよいことですから、PPKIJ



はインドネシア企業からの資金的な応援を得やすくなるはずだ、というのがC.P.I.の会長さんの意見でした。

みつめは、いまのPPKIJの奨学金の使い方の中で、大学生に出す割合が年々大きくなっている問題の解決です。このことにより、2003年度には新しい中学生教育里子を選べなくなっていました。C.P.I.-PPKIJの活動は、「貧しい家庭に育っているが成績優秀で活躍的な中学生を選び、高校入学、国立大学入学ができるように支援しよう」というところに特徴があります。新しい中学生を選ぶことができなければ、この特徴がなくなってしまいます。PPKIJのすべての地域リーダーは、大学生のうち、第1スメスター(最初の6ヶ月)から第4スメスターまでは、絶対に自分で学費を稼ぐのが無理と言いました。そこで、2005年の8月までは、すべての大学生教育里子に教育里親さんの支援金で支援し、そのあとは第5スメスターより上の学生には自力で学費を稼げるようになります。そして、その間、2004年度はC.P.I.が支援金を増やして、新しい中学生を80人選ぼうということになり、これはPPKIJにとって嬉しいことでした。

大学三年からは自活をめざします

2004年の9月に開かれたC.P.I.理事会との会議、今年の4月のC.P.I.会長との会議で、いよいよ、これら3つのうちのふたつを開始することになりました。教育里親さんからの支援金はすべて学生の学費や通学費や里子会活動だけに使われます。今年の9月から第5スメスターより上の大学生のために、自力で学費を稼がせるプログラム(個人教師斡旋プログラム)を始めることになります。C.P.I.の会長さん、担当する理事のみなさまや長期滞在のC.P.I.ボランティアの方も、私たちPPKIJの中央委員会や地域リーダーも、今まで以上に活動をしなければなりませんが、喜ぶ子どもたちの顔を楽しみに頑張りたいと思います。大学生たちも、中学や高校の教育里子への無料塾をしてきた経験を生かして、力強く自立プログラムに向かってほしいと願っています。どうぞ応援をよろしくお願ひします。